

教育環境についての意識調査 —教育環境アセスメントに関する研究 第4報告—

金平文二*・岩井絹江**

(昭和60年9月30日受理)

Opinion Survey for Educational Environment —A Study for Assessment of the Educational Environment (IV) —

Bunji KANEHIRA and Kinue IWAI

(Received September 30, 1985)

はじめに

教育環境アセスメントに関する第2報告「人間成長過程における教育環境阻害要因の探索」および第3報告「教育環境を阻害する各種要因の探索」において、教育環境を阻害する要因について、直接的に影響を及ぼす阻害要因や間接的な阻害要因など、さまざまな要因があることを分析し、各要因についての考察を行った。

しかしながら、この分析によって挙げられた要因には多種多様なものがあり、そのうちどれを取り上げるか、個々にどのように検証していくかはきわめてむずかしい問題であるが、この第4報告では、教育環境について最近とくに問題とされている事項を取り上げ、質問紙法による意識調査を実施することによって、教育環境を阻害する要因について、さらに深く探索を行うことを意図した。

I 研究の目的

青少年の教育のありかたや教育環境について、現在われわれが当面しているいくつかの重要な問題を取り上げ、現に教育を受けている学生層や小、中、高の子どもを持つ父母層がどのような意見を持っているかについて意識調査を実施し、実態を把握することによって、教育環境改善への手がかりを得ようとするものである。

II 研究の方法

1. 調査対象

今回の調査は探索的な研究を意図したため、調査対象

* 児童学科

** 学生部

を本学学生および大学近隣、大学関係者の父母層に依頼した。調査表の配布数は350名、回答数は学生層205名、父母層115名あり、回収率は91.4%である。

2. 実施期日

昭和60年7月8日～7月15日の期間に調査表の配布および回収を行った。調査対象者に調査の主旨を説明し、協力を求めた。なお、父母については、附属幼稚園、大学関係者に調査表を配布し、回答を依頼するようにした。

3. 調査表の設計

調査表の質問項目は、すでに調査を行った「教育環境を阻害する各種要因の探索」に基づいて、KJ法の手法を用いて選定し、内容別に分類整理して多肢選択式の質問項目を設計した。質問項目の分野は次のとおりである。

選択式質問——22問

I 学校教育における問題点

II 期待される人間像

III 自殺・性教育・中退の問題

IV 教師のありかた

V 学歴社会の問題

VI 今後の社会への適応の問題

記述式意見——1問

計23問で質問項目を構成した。回答方法は調査表に直接回答する方式とした。

4. 調査結果の集計

集計は、性別、世代別の各選択肢についての度数および全体に対する割合を作表化、図式化し、それらの結果について分析検討を行った。記述式意見については、内容をカテゴリー別に分類し、度数およびパーセントを算出し、それらに考察を加えた。

5. 調査結果とその考察

調査表の全質問項目について図示し、考察を行うことは紙数の関係でできないので、質問内容からみて、また層別に顕著な差のみられる項目について取り上げ、パーセンテージ比較棒グラフ等で図示したが、調査結果の概要は以下のとおりである。

I 学校教育における問題点

問1 あなたはこれまでの経験の中で、今の小中学校の教育に満足していますか。

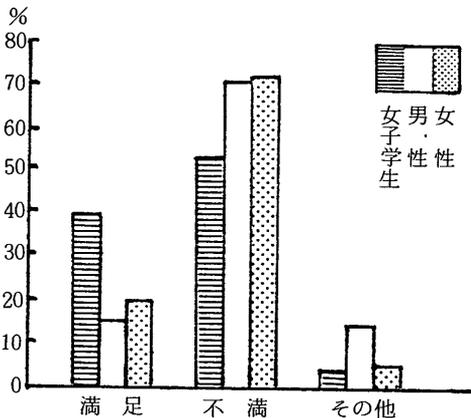


図1 学校教育への満足度

自分の経験の中で現在の学校教育に対する満足、不満をみると、20代後半～50代の父母層は男女の別なく70%以上が「不満」と答えており、学生の54%も「不満」を選んでいる。子育て中の父母層の大部分がこのように学校教育の現状に不満を抱えていることは、教育問題の深さをあらためて感じさせる。

しかし、教育を受けている最中であり、父母層より小中学時代に近い学生の約40%が満足、約50%が不満と回答していることは注目すべき点である。さらに、その他の項目に答えた6.5%の学生の中に「自分の小中学時代は満足していたが、ニュース等で聞く学校教育には不満である」という自由記述がいくつかみられた。

今後、不満と答えた人からは「どんな点が不満か」、満足と答えた人からは「どんな状況に満足感を感じているか」を多方面にわたって調査し、教育環境のあり方の改善に役立てることも一つの方法であろう。

問2 今の学校教育で、あなたがもっとも切実な問題だと思うのはどんなことですか。

女子学生（以下学生と呼ぶ）、父親層（以下男性と呼ぶ）、母親層（以下女性と呼ぶ）で問題を感じている高率順が多少異っている。男性は「先生の質」約30%、「道德教育の不十分」約20%、「いじめ」約20%の順で挙げているのに対し、女性は「いじめ」約35%、「先生の質」約30%、「学校の管理主義」約20%の順となり、学生は「いじめ」約40%、「偏差値」約20%、「先生の質」約15%の順となっている。

女性や学生では10%以下である「道德教育の不十分さ」を男性が第2位で挙げていることは、何を物語っているのだろうか。男性は職場において若い部下をもち、日頃感じている社会人としての視点でものを観ているともいえる。男性や学生では10%以下となっている「学校の管理主義」が女性では第3位となっているが、母親として男性（父親）や学生よりPTA、授業参観等で学校に行く機会も多く、学校のあり方の現状に必ずしも満足していないことのあらわれであろうか。

今後、教育問題を考えていく上で、学校や家庭での道德教育のあり方や学校・教員のあり方（管理主義）は重要な問題点であり、幅広い視野に立って十分検討していく必要があろう。

問3 校内暴力をなくすためには、どのような対応が望ましいと思いますか。

表1 学校教育の問題 (％)

項目	女子学生	父親層	母親層
1. いじめ、校内暴力	40	17	32
2. 先生の質	14	27	24
3. 道德教育が不十分	5	19	9
4. 偏差値による進路指導	21	15	13
5. 入試制度	8	10	7
6. 学校の管理主義	11	10	15
7. その他	1	2	2

表2 校内暴力への対応 (％)

項目	女子学生	父親層	母親層
1. 家庭内での親と子のあり方、しつけを考え直す	51	48	63
2. 学校での教育、管理主義を考え直す	19	27	16
3. なぜ暴力をふるうのか、生徒の心の病いを直す	27	17	20
4. 思春期には情緒が不安定になりがちなので、とくに対応策など考えなくてよい	1	0	0
5. その他	2	8	1

今回、掲載していないが質問表ではじめの原因について「なぜ学校でいじめが起こると思いますか」という質問をしており、これに対する回答が三者とも同様に「相手の立場を考えられない子がふえているから」60～70%、「欲求不満がたまっているから」と答えている。

このような原因からくる「いじめ＝校内暴力をなくするにはどのような対応が望ましいか」という問3の質問に対して、三者共に50～60%の人が「家庭での親と子のあり方、しつけを考え直す」を挙げている。さらに、三者共第2位は「学校での教育・管理体制を考え直す」で20～30%の人が挙げている。

前述問2の「教育問題」でも学校・家庭での道德教育のあり方や学校・教員のあり方が問題としてクローズアップされていたが、この「校内暴力をなくすための対応」の質問でも同様の回答が多い。

いじめ、校内暴力がはびこり、全体的に不満が多いといわれている学校教育の現状に対して、「しつけは親の責任で家庭ですべきものだ」とか「学校教育のあり方や先生の質に問題がある」など、親对学校・教員で責任の回避や線引きをしあわずに、子どもを中心に社会全体の問題として捉え、十分検討し良い方向に解決すべきであろう。

また、この質問の他にも、・親、子、学校のつながりや信頼関係を深める ・善悪のけじめを自分の子、他人の子の区別をせず大人の責任としてはっきりさせる ・学校、家庭で集団活動を身につけさせる ・社会全体の環境改善など社会全体で検討の必要性が述べられていた。

II 期待される人間像

問4 学歴社会といわれる現代において子どもが受験に追われた生活をしていることについてどう思いますか。

全体平均の高率をみると「2.受験に追われる生活は学歴社会ではしかたない」が35%で1位となっている。しかし、学生・男性・女性の高率順を比較してみると順位にも同一項目内の%にも差が出ている。学生は「3. 37%」、「4. 31%」、「2. 28%」の順で、男性は「4. 33%」、「2. 28%」、「3. 20%」、女性は「2. 50%」、「4. 27%」、「3. 17%」の順となっている。さらに「2.」の項目内の%を比較すると女性の50%に対し学生、男性は28%と大きく差が出ている。女性の半数が受験はしかたが

表3 受験に追われた生活について (%)

項目	女子学生	父 母 層 男性 女性
1. 一流大学、一流企業に行くことは、より良い生活を送るために必要なので受験勉強に励むのは当然である	1	10 3
2. 受験に追われた生活をしているのはかわいそうだが学歴社会の中で生きていくためにはしかたがない	28	28 50
3. 人間としての価値は学歴だけで計れるものではないから、受験などにふり回されるのはおかしい	37	20 17
4. 学歴社会など気にせず、自分の個性にあわせた人生を送ればよい	31	33 27
5. その他	3	9 3

ないと思っているのに対し、受験を終えたばかりの学生や学歴社会といわれる現状の中で、今を生きていかざるをえない男性の半数以上が、受験にふりまわされるのはおかしいとか個性にあわせた人生を送ればよいと思っているようだがこの違いが気になる。父母層間の男女の意識差は、男性（社会）、女性（家庭）という一般的に各々が置かれている環境と学歴社会について日々感じていることの違いのせいであろうか。

しかし、「1.より良い生活のために受験勉強は当然」の項目では、男性が10%で他に比べて少し多いのも学歴社会の現実を感じさせた。また、その他自由記述では学生、男女の別なく「自分が目的を持ち自覚して行う受験勉強はやむをえない」とする意見がいくつかあったが、受験の現状や学歴社会への不満を訴える意見が多かった。今、臨教審やマスコミでこれらの問題がいろいろ取りあげられているが、人間の生き方を含めそのあり方について多面的に検討していく必要がある。

問5 自分の子どもが将来どんな人間になることを期待しますか。（もっともなってもらいたいもの）

この質問については回答者が育った環境、その人の生き方や経験等が影響しているようで、自分の子どもの将来への期待は各選択肢に10～20%のバラつきがみられる。

三者各々の高率順をみると、学生の1位は22%で「8. 毎日楽しく生活できる人間」、父母層では男性も女性も1・2位の%にほとんど差がなく、両者共に約25%が「1.仕事も家庭も大切にし、社会に役立つような人間」、さらに約25%が「2.自己に忠実に信念をもった人間」を選んでいる。学生の数値は今の若者の生き方をあらわしているともいえる。さらに父母層の数値は、現在の

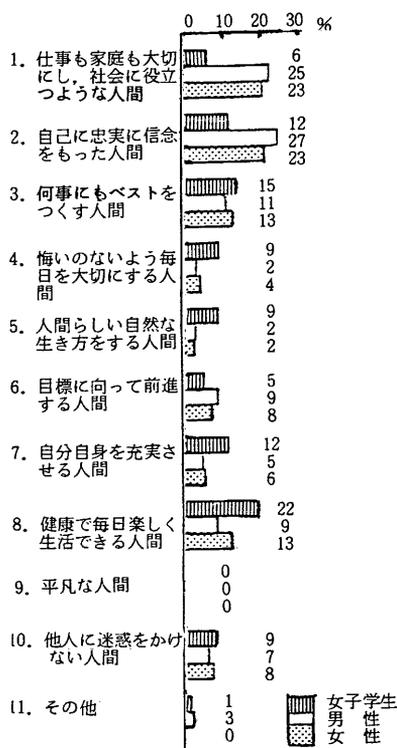


図2 子どもの将来への期待

一般的な生き方を反映しているともいえ、自分の子どもに対しても「家庭と自分を大切にしながら、社会にも役立つような人間になってもらいたい」と思っていることがあらわれている。

自分の子どもの将来への期待の回答には、人々の生き方の多様化がよくあらわれている。学歴社会や受験勉強、教育のあり方等教育問題を考えるにあたっては、中流意識が定着する中でもその見方や価値観、生き方が多様化してきていることも忘れてはならないことだと思われる。

Ⅲ 自殺・性教育・中退の問題

問6 子どもの自殺が増えているといわれますが、自殺する子どもが増えている原因は何だと思えますか。

自殺の原因について、父母層は男女共に40%が「忍耐力、持久力のない子が増えている」ことを挙げているが、学生はどの項目にも高率のものがなく、各項目25%前後となっている。このことは子ども＝学生に置き換えてみると、大人の半数近くが自殺の原因を子どもに忍耐力が

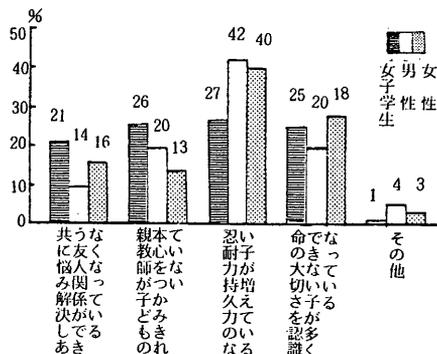


図3 子どもの自殺の原因

ないからと考えているのに対し、子どもはいろいろな状況の中で多様な悩みを持ち、自殺に追まれているのではないと思われる。

最近いじめ等が原因で自殺をする子どもの事件が目につくが、多様な悩みを持つ子どもたちが自らの手で幼い生命を断つことのないよう、教育問題として早急な取り組みが必要であろう。

問7 性教育をどのように指導すべきと考えますか。

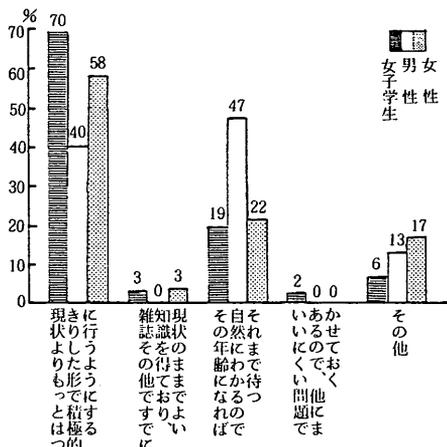


図4 性教育

この質問に対する回答は学生、父母層の違いではなく、男女の差がはっきり表われている。性の問題については各々がこれまでに受けてきた性教育を基準に回答しているとも考えられる。男性の約50%が「その年齢になれば自然にわかるのでそれまで待つ」を選んでのに対し、学生の70%、母親層の58%が「現状よりもっとはっきりした形で積極的に行う」を選んでいる。全体の平均をみても、やはり「もっとはっきりした形で」が55%になる。

自然にわかるまで待つという男性の考え方もある程度理解できる。しかし、性情報の氾濫、青少年の性犯罪や

不純異性交遊の増加、さらに栄養状態が良くなり子どもの身体が心に比べ著しく発達している現状では、性に対するモラルや正しい性知識を年齢に応じ教育する必要があると思われる。

問8 高校中退が増加していますが、それについてどう思いますか。

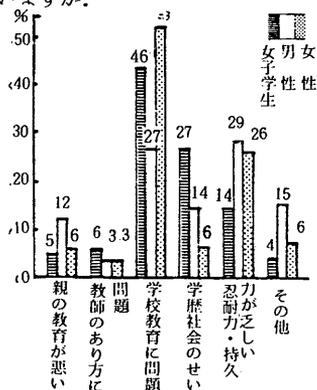


図5 高校中退

学生と父母層に意見のくい違いがあるのではないかと予想をしていたが、男女間に差がみられる。学生、母親層とも女性の40~50%が「学校教育に問題がある」を選んでいる。これに対し男性は、各項目に10~30%の割合でバラついている。多少多いのが「忍耐力、持久力が乏しい」29%、「学校教育のあり方」27%となっている。

高校中退は年々増加しているが、義務教育ではないことや高校で表立せず退学の形をとっているので教育問題として取りあげられていることは少いように思う。この問題は偏差値教育、輪切り進学指導、むりやり入学など背後に持つ問題は表面よりもっと大きい。今後、教育問題としてきちんと対応していく必要がある。

IV 教師のありかた

問9 これから、教師（小、中、高）はどうあるべきだと思いますか。

学生、父母層共に回答が「個性や創造性を引きだそうとする教師」、「学業は少し落ちて子どもと遊べ、個性の引きだせる教師」に集中しており、両方で80~90%をしめている。特に学生の61%は「3.」を望んでいる。

子どもの将来を考えると、学歴社会で生きていくためには、受験勉強に追われることもやむなしとしている人が35%いる中で、「1.上級学校進学のための教科の専門家」を選んだ人は1~2%にすぎない。

表4 教師のありかた (%)

項目	父母層 (%)		
	女子学生	男性	女性
1. 上級学校へ進学のための教科の専門家	1	2	3
2. 規則やしつけをきびしくするこわい教師	1	4	0
3. 個性や創造性を引きだそうとするユニークな教師	61	38	48
4. 学業は少し落ちて子どもとよく遊べ、個性を引きだせる明るい教師	35	45	43
5. 子どもと妥協せず、今の教育制度をきちんと守る教師	0	0	1
6. その他	2	11	5

あらゆる情報があふれ、衣食住の生活様式が同一化し、国民みな中流意識の中で個性が失われようとしている昨今、ほとんどの人が教師に対し子どもの個性・創造性を引き出してもらいたいと考えているようである。子どもが自分らしく、人間らしい生活ができるよう、教師に望むだけでなく、大人の責任として、社会全体の責任として真剣に考えていく必要がある。

問10 現在の大学は一般的にいったどのような点で役立っていると思いますか。

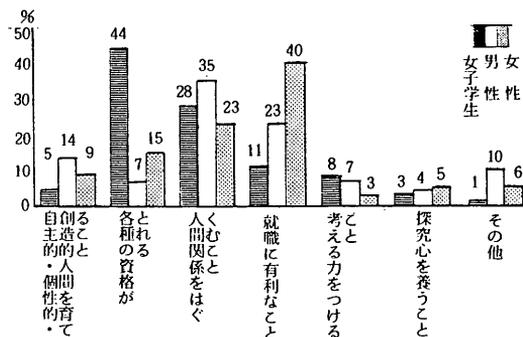


図6 大学は何に役立つか

学生、父母層各々の高率順をみると、学生は「資格がとれる」44%、「人間関係をはぐくむ」28%、男性は「人間関係をはぐくむ」35%、「就職に有利」23%となり、女性は「就職に有利」40%、「人間関係」23%の順になっている。

小中高の教育に子どもの個性や創造性をのばす教育を望みながらも、資格・就職など将来への直結を重視するのは最終学校であるためやむをえないことであろう。

しかし、男性が第1位で挙げているように、大学での勉強は資格・就職のみではなく、人間関係の難しい時代に人間関係・探究心・考える力を学んでもらいたいもの

である。大学教育もこれらに応えられるような努力をしていく必要がある。

V 学歴社会の問題

問11 学歴社会の問題についてどう考えますか。

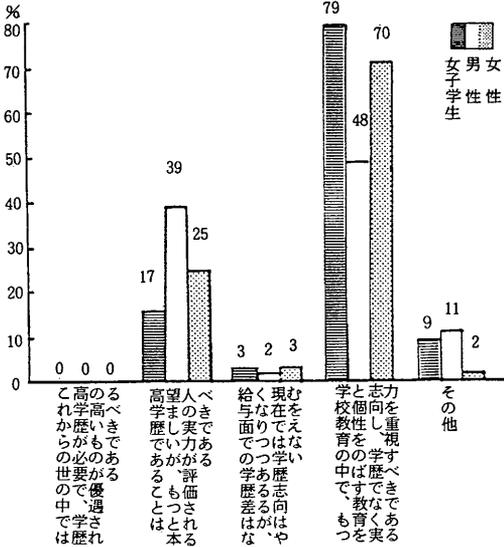


図7 学歴社会の問題

学生、父母層の女性の70~80%が「学校教育の中で、もっと個性をのばす教育を志向し、学歴でなく実力を重視すべきである」を選んでいる。これに対し男性の48%が同項目を選んでいるが、さらに男性の40%の人は「高学歴であることは望ましいが、本人の実力が評価されるべきである」を選んでいる。これは男性は実社会での日々の体験の中で「実力の評価」が、必ずしも自分の能力・実力に見あう評価がされていないと考えていることのアラわれではないかとも思われる。

学歴社会についてはいろいろ問題は多いが、技術革新がさらに進むであろうこれからの世の中を生きていくためには、学歴ではなく、本人自身の問題解決力が必要となる。各方面でこの問題について論じられてはいるが、教育と学歴についてさらに考えていく必要があると思われる。

VI 今後の社会への適応の問題

問12 社会が複雑化し、人との交流も満足に行われないう現在、あなたにどんな影響が出てきていると思いますか。

この質問については、学生・男性・女性の三者の間に

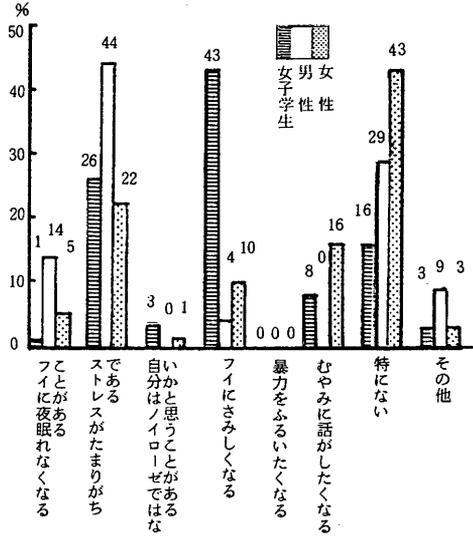


図8 複雑化する社会の影響

差が出ている。学生の40%が「フイにさみしくなる」、30%が「ストレスがたまる」を選んでいる。また実社会の複雑化の中に入っていないといえる学生が、フイにさみしくなると答えているのは若者のゆるる心理状態のせいであろうか。実社会で一番複雑な状況の中に置かれ、日々人との交流の難しさを感じているであろう男性の45%が、「ストレスがたまる」と回答しているのに比べ、父母層の女性の43%が「特にな」と答えているのは意外であった。

いずれにしろ、今後さらに技術革新が進み、社会は複雑化し、人との交流は難しくなっていくと思われる。このような状況だからこそ、これから育つ子どもの教育については十分考えていく必要がある。

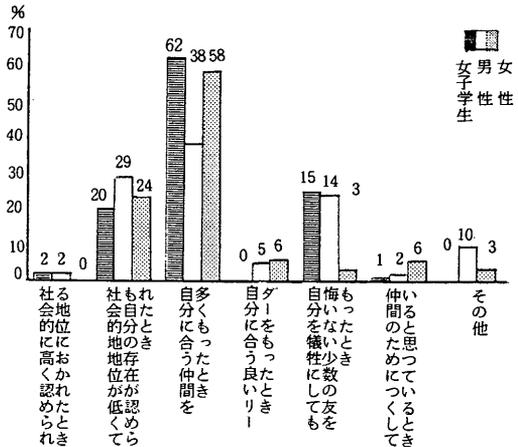


図9 精神的に一番安定する人間関係

問13 あなたはどのような人間関係におかれた時に精神的に一番満足しますか。

この質問についても学生・父母層の違いではなく、男女差が出ているように思われる。学生・女性の60%前後の人が「自分にあう仲間を持ったとき」と答えているのに対し、男性の38%が女性と同項目を、さらに29%が「社会的に地位が低くても自分の存在が認められた時」を挙げている。

価値観、生き方が多様化しても、人間は自分の存在が認められない時くらいさみしいことはないであろう。子どもたち、どの子にも個性、特性がある。個性を引き出し、個々の存在を認め、さらに能力を伸してやれ、円満な人間関係のつくられるような教育環境や条件を大人の責任としてつくっていくべきであろう。

おわりに

この調査は、教育環境について最近とくに問題とされている事項について、限られた範囲の探索的調査であるが、以上の考察から明らかなように、学生層・父母層間に、また、男性・女性間に、教育環境問題に関して、意識面にかかなりの差異があることがわかり、興味ある示唆

が得られたように思われる。今後これらの示唆を手がかりにして、教育環境問題について、さらに広範囲にわたる調査を継続研究として実施していく予定である。しかし、教育環境にはいろいろな要因が関与しており、問題の解決は早急には得られないが、多面的で、実証的な調査・研究を行い、教育環境を阻害する要因を明確にし、それらをどう解決するかについて探究を進めていく考えである。

参考文献

1. 金平文二・岩井絹江：女子学生の意識についての調査—教育環境アセスメントに関する研究—第1報告 東京家政大学研究紀要, 24 pp. 49—69 (1984)
2. 金平文二・岩井絹江：人間成長過程における教育環境阻害要因の探索—教育環境アセスメントに関する研究第2報告 東京家政大学研究紀要, 25 pp. 53—62 (1985)
3. 金平文二・岩井絹江：教育環境を阻害する各種要因の探索—教育環境アセスメントに関する研究—第3報告 東京家政大学研究紀要, 25 pp. 61—68 (1985)